

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷五第

行發日一月十年六正大

論 說

物價變動ノ原因(一).....法學博士 河上 肇

經濟的行爲ト道德的行爲トノ關係(二).....法學博士 田島 錦治

所得稅ニ於ケル所得ノ意義(三).....法學博士 神戶 正雄

同盟罷工ト和解及仲裁制度(四).....法學士 河田 嗣郎

墨子ノ經濟思想(五).....法學士 小島 祐馬

割地ト村落制トノ關係.....法學士 牧野信之助

現代の保險ノ成立(三、完).....法學士 小島昌太郎

時事問題

米國ノ參戰.....法學博士 戸田 海市

物價調節ノ意義及效果.....法學士 河田 嗣郎

雜 錄

りすとノ經濟發達階段說.....法學士 本庄榮治郎

各國ニ於ケル物價騰貴ノ趨勢.....法學士 山本美越乃

戰後ノ太平洋定期航路.....法學士 小島昌太郎

朝鮮ノ關稅ニ就キテ.....法學博士 神戶 正雄

露國ノ定期刊行物ニ就テ(三、完).....文學士 高倉 輝

しゆもらあ教授ノ史傳ニ就テ.....文學士 長 壽吉

經濟論叢

第五卷 第四號 (通卷第二十八號) 大正六年十月發行

論 說

物價變動ノ原因 (二)

河 上 肇

一、緒言——(物價騰貴ノ直接原因トハ何ゾヤ——物價トハ何ゾヤ——物價ノ變動ト貨幣ノ價值ノ變動——貨幣

ノ價值ノ絕對的變動ト相對的變動)

二、貨幣ノ數量ト一般物價 (一)——(貨幣數量說——其代表的學說トシテノふいしやー氏及ビバーカー氏ノ議論

——交換方程式及ビ物價方程式——二個ノ大假定ノ下ニ於ケル貨幣數量說ノ是認(以下次號)

一、緒 言

本篇ノ主眼トスル所ハ、物價變動ノ直接原因ヲ明カニセントスルニ在ル。

茲ニ特ニ直接ノ原因ト言フ所以ハ他ナシ、元來物價ノ變動ハ極メテ複雑ナル諸種ノ因果關係ヨリ發生スルモノナレバ、若シ之ガ一々ノ原因ニツキ更ニ其原因ノ原因ニ遡リテ考究センカ、議論

ハ殆ド窮極スル所ナキニ至ルベキガ故ニ、本篇ニ在ツテハ、物價ノ變動ソノモノヲ中心ト爲シテ無數ノ原因ヲ分類シ之ヲ一定ノ直接原因ニ統一シ、複雑ナル因果ノ關係ヲ整理シテ成ルベク簡單ナル形式ニ概括センコトヲ主眼トスルカラデアル。

次ニ物價ノ變動ト謂フハ、一般物價ノ變動ト云フ意味デアル。物價トイフ語ハ、今日往々ニシテ個々ノ貨物ノ價格ヲ指ス爲ニ用ヒラルルコトアルモ、ソハ蓋シ誤用ナラン⁽¹⁾。假ヒ誤用ナラズトスルモ、余ガ本篇ニ謂フ所ノモノト異ル。思フニ、個々ノ貨物ノ價格ノ變動ハ、縦ヒ之ヲ一定ノ社會、一定ノ期間ニ就テ言フモ、決シテ互ニ相同ジキモノニ非ズ。同ジ社會、同ジ期間ニ於テ、或貨物ノ價格ハ大ニ騰貴セルニ、他ノ貨物ノ價格ハ却テ下落セルコトアルベク、假ヒ又凡テノ貨物が相共ニ或ハ騰貴シ或ハ下落スルコトアルモ、其騰貴又ハ下落ノ程度ガ全ク相同ジト云フコトハ、事實上アリ得ベカラザル事デアル。乍併、此等各種ノ貨物ノ價格ノ變動ヲバ概括シ平均シテ觀察スルナラバ、凡テノ貨物ノ價格ノ標準ハ、全體ニ於テ或ハ騰貴シ或ハ下落シタリト言フコトヲ得。而シテ余ガ本篇ニ於テ一般物價ノ變動ト謂フハ、即チ此ノ如キ一般貨物ノ價格標準ノ變動ノコトデアル。尤モ各種ノ貨物ノ價格ガ相異レル方向及ビ程度ニ於テ變動シ居ルモノヲ、如何ニシテ概括シ又ハ平均スルカハ、所謂物價指數ノ作製ニ關スル問題ニシテ、自ラ種々ナル理論上ノ問題及ビ困難複雑ナル技術上ノ問題ヲ伴フモノナレドモ、此等ノ問題ハ本篇ニ於テ論ズベキ限リ

(1) 齊ニ用語ノ上ニ於テノミナラズ、思想ノ上ニ於テモ individual prices ト general prices トナ混同スルモノ少カラズ。近頃發布サレシ所謂物價調節令ニ對スル世論ニ就テ見ルモ、此二者ヲ混同セルモノ頗ル多キガ如シ。猶山崎博士、『貨幣銀行問題一斑』第十五篇、物價ナル語ト題スル論文ヲ參照スベシ。

ニハ非ズ。サレバ茲ニハ、一定ノ社會ニ於テ貨幣(又ハ其代用物タル信用)ト交換セラルル一切ノ財(無形財例ヘバ一ヶ月間ノ家屋ノ用又ハ一日分ノ勞動等ヲモ凡テ包含ス)ノ價格ノ變動ハ、何等カノ方法ヲ以テ完全ニ概括サレ又ハ平均サルルコトニ依リ、所謂一般物價ノ變動トシテ正確ニ表示サレ得ルモノナリト假定シ置キ、而シテ其ノ一般物價ノ變動ニ就キ之ガ直接原因ヲ考究セントスル次第デアル。

扱テ一般物價ノ變動ト云フコトヲ以上ノ如キ意味ニ解センカ、其原因ヲ考究スト云フコトハ、或意味ニ於テ、貨幣ノ價值ノ變動ニ就キ其原因ヲ考究スト云フコトト、全ク同ジ問題ト爲ルガ如クデアル。何故ゾト云フニ、若シ貨幣ノ價值ト云フコトヲ其客觀價值ノ意ニ解センカ、ソハ即チ貨幣以外ノ財ニテ秤量シタル貨幣ノ相場ノコトニテ、換言スレバ、一定額ノ貨幣ガ他ノ一般ノ財ヲ購買シ得ル力即チ所謂貨幣ノ購買力ニ外ナラザルヲ以テ、例ヘバ一般物價下落シ、從ウテ一定額ノ貨幣ニテ購買シ得ラルル財ノ分量ヲ増加スルナラバ、其ノ物價ノ下落ト云フコト其レ自身ガ即チ貨幣ノ價值ノ騰貴ヲ意味シ、之ニ反シ、一般物價騰貴シ、從ウテ一定額ノ貨幣ニテ購買シ得ラルル財ノ分量ヲ減少スルナラバ、其ノ物價ノ騰貴ト云フコト其レ自身ガ又貨幣ノ價值ノ下落ヲ意味スルコトト爲ル。故ニ一般物價ニシテ騰貴スレバ、吾人ハ直ニ之ヲ以テ貨幣ノ價值ノ下落ト看做スヲ得ベク、又一般物價ニシテ下落スレバ、吾人ハ直ニ之ヲ以テ貨幣ノ價值ノ騰貴ト看做ス

ヲ得ベク、カクテ一般物價ノ變動原因ヲ考究スト云フコトハ、貨幣ノ價值ノ變動原因ヲ考究スト云フコトト、竟ニ全然同一ノ問題タラザルヲ得ザルニ至ルガ爲デアル。

乍併、貨幣ノ價值ト云フ語ヲバ、客觀價值即チ貨幣ト一般ノ財トノ交換關係ヲ表示スルノ語ナリト解釋スルコトナク、之ヲ以テ主觀價值即チ人ガ貨幣ソレ自身ヲ尊重スル程度ヲ表示スルノ語ナリト解釋センカ、物價ノ變動原因ト云フコトト貨幣ノ價值ノ變動原因ト云フコトトハ、必シモ同一問題タラザルコトト爲ル。

尤モ價值ト云フ語ヲバ縱ヒ此ノ如キ主觀價值ノ意味ニ解ストスルモ、物價ノ變動ハ猶ホ貨幣ノ價值ノ變動ニ外ナラズト見ユル場合ハアル。今一例ヲ舉ゲテ其關係ヲ明カニセンニ、例ヘバ明治十四年ヨリ同十八年ニ至ル間、我國ニ於ケル諸種ノ貨物ノ價格ハ殆ド皆相伴ウテ下落セシモノデアル。試ニ之ヲ東京市場ノ相場ニ徴スルニ、此期間ニ於テ米以下六種ノ重要商品ハ略ボ左表ノ如キ變動ヲ呈シタリ。

	明治十四年	明治十八年
米 一石	10.263	6.200
鹽 一石	1.260	1.115
新鹽 二十廿日	0.265	0.260
	炭 一噸	0.212
	油 一石	12.405
	綿 六貫目	11.260
		9.333

此ノ如ク殆ド凡テノ物ノ價格ガ相伴ウテ變動スル時ハ、吾人ハ、價值ノ變動ノ主要ナルモノハ貨物ノ側ニ起リシモノナラン、ト考フルヲ常トスル。譬ヘバ、汽車ニ乘リテ停車場ニ停マリ居ル

時ハ、畜ニ自己ノ乘リ居ル車室ノミナラズ、他ノ凡テノモノモ殆ド皆靜止シ居ルガ如ク見エ、獨
リ動キツツアルガ如ク見ユルモノハ纔ニ昇降ノ乘客、賣子等ニ止マルガ故ニ、斯カル場合ニハ吾
人ハ汽車ヲ以テ停車シ居ルモノト考フレドモ、之ニ反シ、電柱モ樹木モ家屋モ山嶽モ盡ク走リツ
ツアルガ如ク見エ、獨リ靜止シツツアルガ如ク見ユルハ纔ニ自己ノ乘リ居ル車室ノミナラバ、吾
人ハ、走リツツアルモノハ即チ汽車ナリト考フルヲ常トスルガ如クデアル。而シテ此ノ如キ觀察
ハ多クノ場合ニ於テ差支ナキモノニテ、現ニ明治十四年以降數年ノ間ニ於ケル物價ノ下落ハ、紙
幣ノ回收ニ伴ウテ生ゼシ貨幣ソノモノノ價值ノ騰貴ヲ以テ、其ノ主タル原因ト爲シテ居ルノデア
ル。即チ此ノ如キ場合ニハ、一般物價ノ變動ハ主トシテ世人ノ貨幣ニ對シテ有スル主觀價值ノ變
動ニ本クト言ヒ得ベキモノナルガ故ニ、縱ヒ價值ト云フ語ヲバ主觀價值ノ意味ニ解ストスルモ、
物價ノ變動ハ即チ貨幣ノ價值ノ變動ニ外ナラズト言ヒ得ラルルガ如クデアル。乍併、此ノ如キハ
此ノ特定ノ場合ニ於ケル偶然ノ現象ニシテ、二者ノ關係ハ必ズシモ常ニ然リト言フヲ得ザルモノ
デアル。何故ゾト云フニ、前ニ述ベタルガ如キ一般物價ノ下落ハ、米、鹽、薪、炭、油、綿等凡
テノ貨物ガ、生産上又ハ交通上ノ技術ノ進歩其他ノ事情ヨリシテ俄ニ其供給額ヲ増加シタルガ爲
メ、其物自身ノ價值ヲ下落シタルニ因ツテ生ゼシ現象ニシテ、即チソハ、貨幣ソノモノニ對スル
一般世人ノ主觀價值ソノモノニ先ヅ何等カノ變動アリシガ爲メ生ゼシ現象ニ非ザルコトモ在リ得

ルカラデアル。

蓋シ價值ト云フ語ヲ客觀價值ノ意ニ解センカ、一般物價トハ一般ノ財ト貨幣トノ交換上ノ關係ヲ言ヒ表セシモノニ外ナラザルガ故ニ、所謂一般物價ノ騰貴ハ即チ貨幣ノ價值ノ下落ニシテ、一般物價ノ下落ハ即チ貨幣ノ價值ノ騰貴ナリト言ウテ差支ナカルベシト雖モ、而カモ一般ノ財ト貨幣トノ交換上ノ關係ニ於ケル斯カル變動ノ原因ハ、或ハ一般ノ財ニ對スル世人ノ主觀價值ノ變動ニ存スルコトアリ、或ハ貨幣ニ對スル一般世人ノ主觀價值ノ變動ニ存スルコトアルベキガ故ニ、若シ價值ナル語ヲ主觀價值ノ意ニ解センカ、一般物價ノ變動ソレ自身ヲ以テ直ニ貨幣ノ價值ノ變動ト同一視スルコト能ハザルモノデアル。

今斯カル關係ヲ明カニスルガ爲メ強イテ用語ヲ設クルナラバ、吾人ハ貨幣ノ價值ノ變動ニツキ、相對的變動及ビ絶對的變動ノ二者ヲ分チ得ベシ。茲ニ相對的變動トハ一般物價變動ノ結果トシテ生ズル貨幣ノ客觀價值ノ變動ニシテ、之ニ反シ、絶對的變動トハ一般物價變動ノ原因ト爲ルベキ貨幣ノ主觀價值ノ變動デアル。何レノ場合ニモ一般物價ノ變動ハアレドモ、而カモ前ノ場合ニハ、貨物ノ側ニ於ケル事情ノ變化ガ其ノ根本原因ニシテ、而シテ其一般物價ノ變動ガ更ニ原因トナツテ反射的ニ貨幣ノ客觀價值ヲ變動スルニ至ルモノナルニ反シ、後ノ場合ニハ、貨幣ノ側ニ於ケル事情ノ變化ガ其ノ根本原因ニシテ、而シテ之ニ本イテ生ズル所ノ貨幣ノ主觀價值ノ變動ガ更ニ原

因トナツテ反射的ニ一般物價ヲ變動スルニ至ルノ差異ガアル。之ヲ要スルニ、余ガ本篇ニ題シテ物價ノ變動ト云ヒ、特ニ貨幣ノ價值ノ變動ト云ハザルハ、コノ二語ノ間ニ如上ノ差異アリ得ルガ爲デアル。

二、貨幣ノ數量ト一般物價 (二)

既ニ述ベタル如ク、一般物價ノ變動ニハ二種アリテ、一ハ貨幣ソノモノノ側ニ於ケル事情ノ變動ニ本キ、他ハ貨幣ト交換セラルル所ノ貨物ノ側ニ於ケル事情ノ變動ニ本ク。而シテ貨幣ソノモノノ側ニ於ケル事情ノ變動ト一般物價ノ變動トノ關係ニ就テハ、古クヨリ貨幣數量說ナルモノ行ハレ居リ、今モ猶相當ノ勢力ヲ有スルヲ以テ、本篇ニ於テハ議論ノ順序トシテ、先ヅ此學說ニ就キ吟味スベシ。問題ハ、貨幣ノ數量ノ増減ト一般物價トノ間ニハ果シテ如何ナル關係ノルモノナリヤ、ト云フコトデアル。

貨幣數量說トモ名クベキモノノ由來ハ極メテ古イ。西洋ニ於テ始メテ明瞭ニ此說ヲ唱ヘ出セシモノハじょん・ろつク(一六九一年)ナリトノコトデアルガ、日本ニ於テモ三浦梅園(其著『價原』⁽²⁾)ハ一七七五年ニ成ル、本多利明(其著『經世秘策』⁽³⁾)ハ一七八九年ヨリ一八〇〇年ノ間ニ成ル等ノ學者ハ、早クヨリ此ノ如キ說ヲ唱ヘテ居ル。乍併、余ハ今此等諸學者ニ週ツテ、此學說ノ沿革ヲ

(2) Laughlin, Principles of Moneyニ據ル。

(3) 瀧本誠一氏編、「日本經濟叢書」第十一卷ニ收ム。

(4) 同上第十二卷ニ收ム。猶「西域物語」モ此點ニ關係アリ。

本庄學士、本多利明ノ經濟學說、「經濟論叢」第二卷、一〇五九頁以下。

小島(駒馬)學士、本多利明、「經濟大辭典」第八卷、三七三六頁。

説ク積リハ無イ。只米國ノふいしやー氏ガ近時唱ヘ出シタル新貨幣數量説ニ至ツテハ、氏獨特ノ議論ト説明法トヲ以テ新タニ此學説ヲ維持セント企テシモノニテ、頗ル學者ノ注意ヲ惹キタルノミナラズ、現ニ學界ニ於テ少カラザル勢力ヲ有シツツアルモノナルガ故ニ、余ハ一應其ノ紹介及ビ批評ノ爲メ、茲ニ若干ノ頁ヲ費シタイト思フノデアル。尤モ氏ノ説ニ就テハ、余ハ嘗テ拙著『金ト信用ト物價』⁽⁵⁾ニ於テ稍々詳細ニ之ヲ評論シ置キタルコトアレドモ、一ニハ氏ノ説ヲ紹介シ批評スルコトガ後ノ議論ニ少カラザル關係アルガ爲メト、今一ニハ、拙著公刊後英國ノばーかー氏ハ、コノふいしやー氏ノ説ニ對シ若干ノ修正ヲ加ヘ、同ジャウニ貨幣數量説ヲ主張シツツアリテ、新タニ之ニ言及スルノ必要ヲ生ジタル爲メトニ依リ、旁々多少ノ重複ヲ厭ハヌ次第デアル。

ふいしやー氏ノ説ハ、一九一〇年十二月亞米利加經濟學協會(American Economic Association)第二十三回ノ大會ニ於テ、一八九六年以後ノ物價騰貴ノ原因ガ研究問題ト爲リシ時、氏ノ始メテ發表シタルモノニテ、其説ノ委細ハ、氏ガ其ノ翌年公刊シタル『貨幣ノ購買力』ニ詳述シテアリ、更ニ其ノ翌年公ニシタル『經濟原論楷梯』⁽⁷⁾ノ中ニモ、其大體ハ述ベテアル。以下余ハ出來得ル限り簡單ニ氏ノ説ノ大要ヲ述ベ、次デ之ガ批評ヲ試ミル積リデアル。

ふいしやー氏ノ貨幣數量説ヲ紹介スルガ爲ニハ、先ヅ氏ノ所謂交換方程式、并ニ之ト關聯スル所ノ物價方程式ト云フモノヲ説明スルノ必要ガアル。コレ亦既ニ余ノ舊著『經濟原論』ニ於テ述ベ

(5) 『律法學經濟學研究叢書』第十二冊

(6) The Purchasing Power of Money, 1911. (高城仙次郎氏譯「貨幣ト物價」)

(7) The Elementary Principles of Economics, 1912.

置キシ所ナレドモ、ソハ當ニふいしやー氏ノ貨幣數量説ヲ理解スル爲メ必要ナルモノナルノミナ
ラズ、一般物價論ノ考究上頗ル有用ナルモノナルヲ以テ、煩ヲ厭ハズ左ニ其大要ヲ説明スル。

先ツ説明ノ便宜ノ爲メ信用取引ノコトハ凡テ之ヲ無視シ、取引ハ皆貨幣ニ依リテ行ハレツツア
ルモノト假定スル。然ル時ハ、一定ノ社會ニ於ケル凡テノ財ノ取引ハ、盡ク之ヲ一定ノ方程式ニテ
言ヒ表シ得ルモノデアル。例ヘバ、或人が一升二十錢ノ米ヲ一石ダケ買ヒ、之ガ代價トシテ二十
圓ヲ支拂ヒタリトスルナラバ、其交換ハ之ヲ次ノ如キ方程式ニ表シ得ル。

$$\text{米} 100 \text{ 升} \times 20 \text{ 錢} = 2000 \text{ 錢}$$

然ルニ凡テ賣買ト云フコトハ、單獨行爲ニアラズシテ必ズ雙方行爲ナルガ故ニ、賣ラレタル品物
アラバ其ハ同時ニ買ハレタル品物デアリ、又買ラレタル品物ノ分量ハ必ズ買ハレタル品物ノ分量
ト一致スベキデアル。サレバ前記ノ如キ方程式ハ如何ナル賣買ニ就テモ之ヲ立テ得ルモノニテ、
且其方程式ノ一方ハ常ニ、取引サレタル品物ノ分量ニ其一單位ノ價格ヲ乘ジタル積ヨリ成リ立チ、
他方ノ項ハ、其分量ダケノ品物ヲ買フ爲ニ提供サレタル貨幣額ヨリ成リ立ツコトト爲ル。仍テ一
定ノ社會(例ヘバ日本)ニ於テ一定ノ期間(例ヘバ一ケ年間)ニ行ハレタル凡テノ取引ニツキ、上ニ
述ベタルガ如キ方程式ヲ作ルナラバ、次ノ如クナルベキ筈デアル。

$$q \times p = m \quad q' \times p' = m' \quad q'' \times p'' = m'' \quad \dots\dots\dots$$

更ニ之ヲ合計スレバ、次ノ如キ一個ノ方程式ガ出來ル。

$$(q \times p) + (q' \times p') + (q'' + p'') + \dots = m + m' + m'' + \dots$$

今此方程式ノ右項ナル $m + m' + m'' + \dots$ ハ一定ノ期間ニ於テ物ノ購買ノ爲ニ提供サレタル貨幣ノ總金高ヲ示スモノナルガ、コハ實ニ莫大ノ金額ニ達スルモノニテ、國內ニ於ケル貨幣額ノ數百千倍ニ上ルベキ筈デアル。然ラバ如何ニシテ此ノ如キ莫大ノ金額ニ上ル取引ガ僅カバカリノ貨幣ニ依リテ行ハレ行クカト云フニ、ソハ貨幣ナルモノハ只交換ノ媒介ヲ爲スコトノミヲ以テ其職分トスルモノ故、同一ノ貨幣ガ幾度トモナク賣買ノ用ニ供ゼラルルガ爲ニシテ、即チ前記ノ方程式中 $m + m' + m'' + \dots$ ノ中ニハ、同ジ貨幣ガ屢々現ハレテ居ル筈デアル。今同ジ貨幣ガ一定ノ期間内ニ於テ賣買ノ用ニ供ゼラルル度數、言ヒ換フレバ、一定ノ貨幣ガ一定ノ期間内ニ物ノ賣買ノ爲メ其所有主ヲ變更スル度數ノコトヲバ、名ケテ貨幣ノ流通速度ト謂フ。然ルニ此流通速度ナルモノハ、一々ノ貨幣ニ就テ其レ々々ノ相違アルモノニテ、即チ或物ハ一ケ年間ニ何百回モ賣買ノ用ニ供ゼラレ、或物ハ一ケ年間同ジ人ノ手ニ留リ居リテ一回モ賣買ノ用ニ供ゼラレザルコトモアリ得ルモノナルガ、兎モ角凡テノ貨幣ニ其ノ一ケ年間ニ於ケル其レ々々ノ流通速度(其最下限ハ零ナリ)ヲ掛ケタルモノヲ總テ合計スルナラバ、之ニ依ツテ物ノ購買ノ爲ニ提供サレタル貨幣ノ總金高ガ分ル譯デアル。而シテ此總金高ハ取リモ直サズ其一ケ年間ニ於テ賣買取引サレタル總テノ

物ノ代價ヲ合計シタル金高ニ相當スベキ筈デアル。サレバ若シMヲ以テ一定ノ社會ニ於テ流通シツツアル貨幣ノ總額ヲ表シ、Vヲ以テ其平均流通速度ヲ表スナラバ、吾々ハ前記ノ式ヲ書キ改メテ次ノ如クスルコトヲ得。

$$(q \times p) + (q' \times p') + (q'' \times p'') + \dots = M \times V$$

猶Qヲ以テ一定ノ期間内ニ賣買取引サレタル財(有形財及ビ無形財ノ凡テヲ含ム)ノ數量ノ合計額ヲ表スモノト爲シ、Pヲ以テ一般物價ノ平準ノ高サヲ表スモノト爲サバ、吾々ハ更ニ之ヲ書キ改メテ $P \times Q = M \times V$

ト爲スコトヲ得。而シテ再ビ此式ヲ書キ換フルナラバ、吾々ハ最後ニ次ノ如キ式ヲ得ル。

$$P = \frac{MV}{Q}$$

而シテ此式コソ即チ一般物價ノ方程式トモ稱スベキモノデアル。勿論コノ方程式ハ信用取引ヲバ全ク無視シ、凡テノ取引ハ皆貨幣ヲ以テ行ハルルモノト假定シタル上ノモノナレバ、實際ノ現象ヲ説明スルガ爲ニハ進ンデ之ヲ補正スルノ必要アレドモ、今暫ク前記ノ假定ヲ其ノママニ認容シ置キ、且新タニ一假定ヲ設ケ、此方程式ハ密ニ其式中ニ含マルル諸種ノ現象ノ共存關係ヲ表スノミニ非ズシテ、同時ニ其ノ因果關係ヲ表スモノニテ、即チ方程式ノ右項ニ在ル三種ノ事情ハ方程式ノ左項ニ在ル一般物價ヲ決定スルノ原因タルモノナリト假定センガ、吾人ハ此方程式ヨリ、左

ノ如キ命題ヲ引キ出スコトヲ得。

一、一般物價ノ平準ハ、貨幣ノ數量、其流通速度、并ニ取引ノ目的物ト爲ル一般ノ財ノ數量ト、此ノ三原因ニ依ツテ左右セラルルモノデアル。

二、貨幣ノ數量ト貨幣ノ流通速度ニ變化ナキ限り、一般物價ハ取引ノ目的物ト爲ル一般ノ財ノ供給額ノ増減ニ反比例シテ高低スルモノデアル。即チ財ノ供給ニシテ増加スレバ物價ハ之ニ比例シテ下落シ、之ニ反シ財ノ供給ニシテ減少スレバ物價ハ之ニ比例シテ騰貴スル。

三、貨幣ノ數量并ニ財ノ供給額ニシテ變化ナキ限り、一般物價ハ貨幣ノ流通速度ノ大小ニ正比例シテ高低スルモノデアル。即チ貨幣ノ流通速度ニシテ増加スレバ物價ハ之ニ比例シテ騰貴シ、之ニ反シ貨幣ノ流通速度ニシテ減少スレバ物價ハ之ニ比例シテ下落スル。

四、貨幣ノ流通速度及ビ財ノ供給額ニシテ變化ナキ限り、一般物價ハ貨幣ノ數量ノ増減ニ正比例シテ高低スルモノデアル。即チ貨幣ノ數量ニシテ増加スレバ物價ハ之ニ比例シテ騰貴シ、之ニ反シ貨幣ノ數量ニシテ減少スレバ物價ハ之ニ比例シテ下落スル。

此中最後ノ命題、即チ財ノ供給量ニシテ變化ナキ場合ニハ、貨幣ノ流通速度ニシテ變化セザル限り、一般物價ハ流通貨幣ノ増加ニ比例シテ騰貴シ、之ヲ減少ニ比例シテ下落スト云フ命題ハ、即チ有名ナル貨幣數量說ヲ形成スルモノデアル。